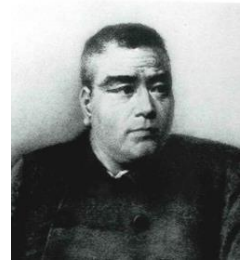


西郷・大久保の決別と西南戦争

鹿児島市「維新ふるさと館」
特別顧問 福田 賢 治



1 中央集権国家の建設と鹿児島

- (1) 戊辰戦争後の薩摩の動き→西郷は鹿児島へ帰郷
- (2) 廃藩置県実施のため、西郷を中央政界へ引き出し
 - 明治4年、政府は勅使として岩倉具視を派遣
 - 明治4年7月15日、「廃藩置県」実施、261藩を廃止、3府302県を配置（11月に統廃合し新たに3府72県）
 - 知藩事を廃止、新たに県令を配置→島津久光は激怒
- (3) 明治3年「地租改正令」により財政基盤を確立→士族の不満へ
- (4) 同6年「徴兵令」→士族の不満へ

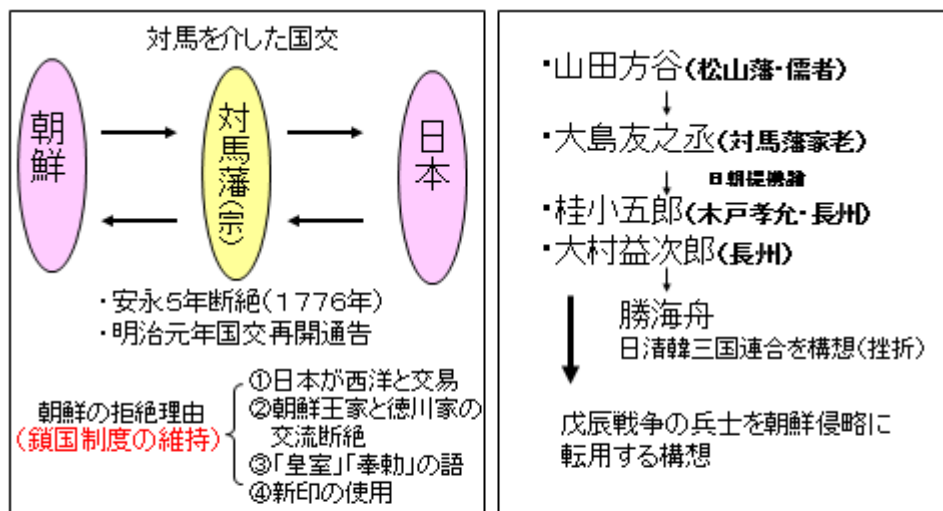


2 岩倉欧米視察団の派遣

- (1) 明治4年11月、岩倉具視が全権大使、大久保利通と木戸孝允が副使
- (2) 不平等条約改正と先進欧米諸国の視察（留学生を含め総勢108人）
- (3) 多くの課題がある中、「約定書」により西郷が留守政府を預かる
- (4) 使節団全員の帰国は、明治6年9月13日、（半年の予定が2年）
 - 大久保は5月、木戸は7月、岩倉は9月に帰国

3 朝鮮使節派遣問題(征韓論争)の発生と結論

- (1) 朝鮮との国交回復問題
 - ① 朝鮮の鎖国政策と日本からの親書（国書）受け取り拒否（国書に「皇」や「勅」の文字使用、印章の相違など）
 - ② 開国した日本は「西洋の夷狄と同じで無法の国」と批判
 - ③ 対馬藩との交流拠点、釜山にある「倭館」との交流遮断



(4) 維新政府の対応

- ① 居留民保護のため「撤退」か「派兵」かの決断
- ② 明治6年8月17日、正院で西郷の朝鮮使節派遣が内定、(ただし、最終的には「岩倉使節団の帰国後に再上奏を」と天皇が裁可)
- ③ 山県有朋や井上馨などに対する排斥運動など国内問題山積で、太政大臣三条実美が岩倉具視(右大臣)に相談、外遊組は反征韓派に意志変換
- ④ 大久保利通を参議にし、西郷派妍を阻止する案を伊藤が岩倉らに相談
- ⑤ 大久保は再三拒否したが説得され、岩倉らに「反征韓を変節しないこと」を約束させ、会議の2日前にやっと参議を受諾
- ⑥ 明治6年10月14日、正院にて朝鮮問題を審議、西郷と大久保が激論結論出ず。
- ⑦ 10月15日、西郷は体調不良で欠席、そのため三条実美に対し、自分の考えをまとめた「朝鮮国御交際決定始末」を提出したが、岩倉などはこれに気付いていなかったようである。三条は回覧しなかったのであろうか、回覧したが目にとまらなかったのであろうか、疑問が残る。
- ⑧ 会議においては西郷派遣が優勢で大久保との「変節しない」との約束にも関わらず、三条は西郷派遣を決定して会議を閉じた。

明治6年正院の構成

太政大臣	三条実美(公)	
左大臣	なし	
右大臣	岩倉具視(公)	
参議	西郷隆盛(薩)	大久保利通
"	木戸孝允(長)	
"	板垣退助(土)	
"	後藤象二郎(土)	
"	大木喬任(肥)	
"	大隈重信(肥)	
"	江藤新平(肥)	副島種臣

<朝鮮国御交際決定始末書>

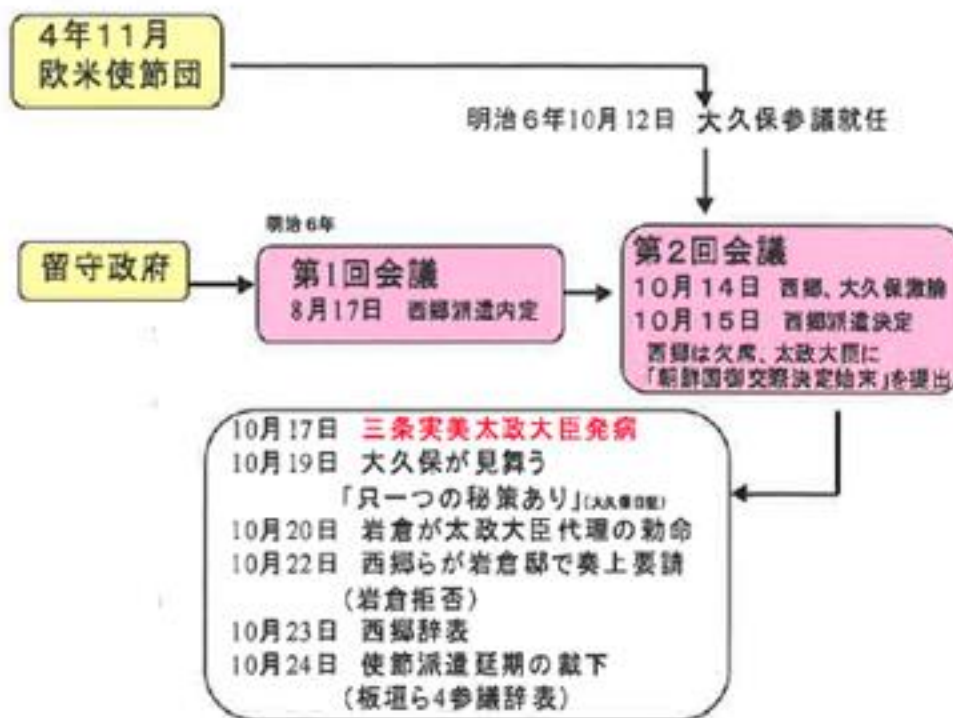
御一新の涯より数度に及び使節差し立てられ、百万御手を尽くされ候得ども悉く水泡に相成候のみならず、数々無礼な働き候これあり、近来は人民互いの商道を相塞ぎ、倭館詰居りの者も甚だ国難の場合に立ち入り候ゆえ、抛無く護兵一大隊差し出さるべく御評議の御承知致し候に付、護兵の議は決して宜しからず、是よりして鬭争に及び候ては、最初の御趣意に相反し候間、此の節は公然と使節を立てらるる相当の事にこれ有るべし。若し彼より・・・」

※岩倉はこの文書を翌明治7年春に発見、西郷が征韓論者ではなかったことに気付き、7年4月6日付で大久保利通にその旨を手紙に記して送付している。

4 西郷派遣決定から派遣中止への過程

- (1) 大久保・岩倉は三条に辞意を表明、一方、西郷らは早く上奏するよう催促、三条は人事不省に三条の病状を理由に大久保、岩倉、伊藤らは一計を案じ、

太政大臣代理に岩倉を据えるよう天皇に働きかけ 10 月 20 日、岩倉が太政大臣代理に就任



朝鮮国御交際決定始末(西郷)

「御一新の涯より数度に及び使節差し立てられ、百万御手を尽くされ候得ども悉く水泡に相成候のみならず、数々無礼な働き候儀これあり、近来は人民互いの商道を相塞ぎ、和館詰居りの者も甚だ国難の場合に立ち入り候ゆえ、御抛なく護兵一大隊差し出さるべく御評議の御承知いたし候に付、御兵の儀は決して宜しからず、是よりして闘争に及び候ては、最初の御趣意に相反し候間、此の節は公然と使節を差し立てらるる相当の事にこれ有るべし。若し彼より……」

七月二十九日付の手紙 西郷から板垣宛

兵隊を先に御遣し相成り候儀は如何に御座候哉、必ず彼方より引揚げ候様申立て候には、相違これなく、其の節、此方より引き取らるる旨相告え候はば、これより兵端を開き候はん。左様は、初めよりの御趣意とは大いに相違し、戦を醸成候様に相成り申すべきやと愚考仕り候間、断然使節を先に差し立てられ候方、御意敷はこれあるまじきや。左様は、決して彼より御事の事、差し置き候に付き、討つべき名も絶かに相立ち候事を存し奉り候。

...

公然と使節を差し向けられ候はば、暴徒は致すべき儀と相察せられ候に付き、何卒、私を御遣し下され候処、伏しく願ひ奉り候。

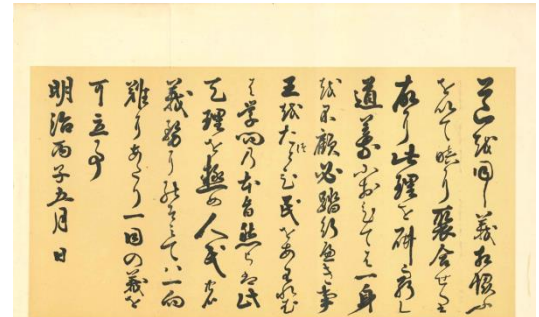
八月十四日付

只、此の一舉に先きだち死なせ候ては、不便な事ともしや姑息の心を御起し下され候ては、何も相叶い申さず候

- (2) 10月22日、西郷、板垣、江藤、副島が岩倉邸を訪問、奏上を要求、岩倉は拒否、「自分は反対なので、自分の考えをあわせて奏上する」と主張、西郷らは激怒、西郷は翌日の23日辞表を提出
- (3) 10月24日天皇は使節派遣中止と裁可、他の4参議らも辞表を提出

5 西郷隆盛の下野

- (1) 明治7年6月私学校の設立と勢力の拡大
- (2) 鹿児島はあたかも独立国の様相
新政府の政策が更に遅延・停滞
- (3) 明治7年佐賀の乱(江藤新平)
江藤が山川の鰻温泉に西郷を訪問
- (4) 廃刀令、金禄公債証書条例に反発
- (5) 神風連の乱、秋月の乱、萩の乱
- (6) 警視庁大警視川路利良が鹿児島に
密偵を潜入させ、私学校党の離間
かく乱と西郷らの刺殺を狙う。
- (7) 2月29日私学校徒が暴発、草牟
田弾薬庫襲撃をはじめ、3月2日まで
- (8) 大久保は私学校徒暴挙の報に接し、2月7
日付伊藤博文宛ての手紙に



私学校綱領



「誠に朝廷不幸の幸と竊に心中笑いを生じ候位にこれあり候」と書き送った。

6 西南戦争へ突入

- (1) 2月1日、小根占の西郷へ報告
○西郷は「我事己む」とその他を
語らず。(西南紀伝)
○「一はなんちゅうこつすつとか」
「ちょっしもた」(辺見十郎太の話)
- (2) 2月5日、私学校講堂で拡大幹部会
○主戦派と慎重派に分かれるが、派兵
に決定
○篠原、桐野、池上、別府、辺見
○村田、永山、河野主一郎、野村忍助



川路 利良(1834~1879)
皆与志町比志島

明治 5年 フランスポリス制度
7年 警視庁大警視
10年 鹿児島出身の警察官
派遣、私学校党の動向
把握 西南戦争の原因

近代警察制度創設
「日本警察の父」

- (3) 2月15日大山綱良県令が熊本鎮台に趣意書を送付(2月19日鎮台受)
- (4) 2月15日~17日、熊本に向けて鹿児島出兵
「政府へ尋問の廉これあり」
- (5) 薩軍の編成

1 番大隊長 篠原国幹

2 番大隊長 村田新八

- 翌未明に官軍本営を急襲、武器弾薬・食糧等を奪い、鹿児島をめざす
 (12) 鹿児島再突入と城山での自刃

- 9月1日鹿児島突入、私学校、城山奪還
 薩軍400人足らず、政府軍5万
 ○4日来島清率いる決死隊(約100名)
 が米蔵(市役所)に突入し全滅(中津藩の
 増田宋太郎も)
 ○薩軍は城山周辺10か所に分散し防備
 ○22日河野主一郎と山野田一輔が政府軍
 に西郷の助命嘆願交渉。認められず。
 ○9月24日午前3時55分政府軍総攻撃
 ○西郷はじめ40数名、洞窟前から岩崎谷
 口の大久保壘へ行く途中で被弾
 ○別府晋介が西郷を介錯

○西郷の首の所在が不確定(諸説あり)



西郷隆盛宿陣跡(児玉熊四郎邸)



西郷洞窟



南洲神社

- (13) 浄光明寺、南洲墓地、南洲神社
 (14) 西南戦争の後遺症(勝ち組と負け組)



